P タメニ **Q** 構文と **P** タメニハ **Q** 構文における

動詞のタイプと意味解釈

言語学・応用言語学専門分野
2015 年(平成 27 年)入学
1LT15121G
福井優志
2020 年(令和 2 年)1 月提出

要旨

本論文は「目的」の意味を表す接続形式タメニとタメニハについて考察したものである。P タメニ Q 構文では、従属節は B 類の性質を持ち、P タメニハ Q 構文では、従属節は C 類の性質を持つ。また、P タメニハ Q 構文において、P タメニハという主題に対して、主節 Q は、さまざまな選択肢の中からある 1 つを選択したもの、という関係性にある。主節 Q には、他に考え付く選択肢がある場合、次にとるべき行為の選択肢を想起させるような表現が来る。

目次

1. 問題提起 1

2. P タメニ Q と P タメニハ Q における従属節 P の分析 3

2.1. 階層的統語表示 3

2.2. 接続助詞 4

2.3. 独立度を測る基準 4

2.3.1. 不定詞を含むかどうか 4

2.3.2. 「ダロウ」のようなモダリティ形式をとるかどうか 5

2.3.3. 疑問の焦点になるかどうか 5

2.3.4. 評価の副詞（残念ながら、不幸にも…）をとるかどうか 5

2.3.5. 同じ階層に属する他の節を含めるかどうか 6

2.4. P タメニ Q における P の独立度 6

2.4.1. 不定詞を含めるか 6

2.4.2. 疑問の焦点になるか 6

2.4.3. 同じ階層に属する他の節を含めるか 6

2.4.4. 「ダロウ」のようなモダリティを含めるか 7

2.5. P タメニハ Q における P の独立度 8

2.5.1. 疑問の焦点になれるか 8

2.5.2. 不定詞を含めるか 8

2.5.3. 「ダロウ」のようなモダリティを含めるか 8

2.5.4. 同じ階層に属する他の節を含めるか 8

3. P タメニ Q と P タメニハ Q における主節 Q の分析 10

3.1. 動詞 10

3.1.1. 状態動詞 11

3.1.2. 「意図・願望・当為評価・有益」を表す動詞 11

3.1.3. テイル形で状態を表す動詞 11

3.1.4. 「継続」を表す動詞 12

3.1.5. 「動作の完了」を表す動詞 12

3.2. 形容詞 14

3.3. 形容動詞 15

3.4. 塩入(1992)との比較 16

4. まとめ 19

参照文献 20

1. 問題提起

日本語には、文の前後をつなぐ接続形式としてタメニがある。

(1) a. 部屋をきれいにするために、掃除機を買った。
b. 全国大会で優勝するために、彼が監督に選ばれた。

(1)では、タメニ節が目的の意を表し、文の前後を繋ぐ役割を果たしている。さらに、(1a)に関しては、以下のような日本語文もある。

(2) a. 皆が気持ちよく過ごせる**ように**、部屋をきれいにするために、掃除機を買った。
b. 値段は張る**けれど**、部屋をきれいにするために、掃除機を買った。

(2a)の文は、「皆が気持ちよく過ごせるように部屋をきれいにする」という目的のもと、「掃除機を買った」という意味でとらえることができる。しかし、(2b)は同じように「値段は張るけれど部屋をきれいにする」という目的のもと、「掃除機を買った」という意味の文としてとらえるのは不適切だ。むしろ、「値段は張る」から前向きではないが、「部屋をきれいにするために掃除機を買った」という意味の文としてとらえる方が自然である。従って(2)の文は、接続詞タメニが包括する節を以下のように[]で囲うと、文の性質の違いがわかる。

(2)' a. [皆が気持ちよく過ごせる**ように**部屋をきれいにする]ために、掃除機を買った。
b. 値段は張る**けれど**、[部屋をきれいにする]ために、掃除機を買った。

また、目的の意を表す他の接続詞として、タメニハがある。

(3) a. 部屋をきれいにするためには、掃除機を買う必要がある。
b. 全国大会で優勝するためには、彼が監督に選ばれるべきだ。

(3)でも、タメニハ節が目的の意を表しているが、主節を(1)の例文と同じにすると、文の容認度は下がる。

(4) a. *部屋をきれいにするためには、掃除機を買った。
b. *全国大会で優勝するためには、彼が監督に選ばれた。

このように、目的という同じ意味を表し、一見似ているタメニとタメニハだが、その用法には違いが見られる。本論文の第２章では、上記(2a)と(2b)に見られるような違いが、何を要因として生まれているのかということについて分析していく。そして続く第３章では、上記(3)と(4)に見られるような容認度の違いがどうして起きるのか、ということについて分析を進めていく。なお、以降、タメニ文を P タメニ Q、タメニハ文を P タメニハ Q と示すこととする。

2. P タメニ Q と P タメニハ Q における従属節 P の分析

P タメニ Q と P タメニハ Q の用法の違いを明らかにしていくために、まずはそれぞれの従属節に着目し、分析を進めていった。その結果、以下の結論を導いた。

(5) P タメニ Q のとき、P は B 類の性質を持ち、P タメニハ Q のとき、P は C 類の性質を持つ。節の独立度としては、タメニハ節のほうがタメニ節よりも高い。

この、「P タメニ Q のとき、P は B 類の性質を持」つことが、先述の(2a)と(2b)の違いを生む要因であったが、その詳細は後程述べる。今回、従属節の分析を行う上で参考にした研究として、田窪(1987)がある。まずはその研究を紹介し、どのようにして上記の結論に辿り着いたかを論じていく。

田窪(1987)では、南(1974)が論じた「階層的統語表示」の分析をし、より詳細な分類を行っている。各階層に対応した接続詞、節の独立度を測る基準の研究も同時に述べられている。

2.1. 階層的統語表示

田窪(1987)をまとめ、以下に日本語文の階層的統語表示を示す。

(6) A 類　１：様態・頻度の副詞＋補語＋動詞
　　２：頻度の副詞＋対象主格＋動詞（＋否定）
B 類：制限的修飾句＋動作主格＋A（＋否定）＋時制
C 類：非制限的修飾句＋主題＋B＋モダリティ
D 類：呼掛け＋C＋終助詞

ここで言う「対象主格」とは、非意志的動作・過程の主体を表し、「動作主格」とは、意志的動作の主体のことを表す。以下、それぞれの階層における例文をいくつか提示する。

(7) A 類 1
a. 歩く。
b. 自分を知る。
c. ご飯をもぐもぐ食べる。

(8) A 類 2
a. 氷が解ける。

b.　氷が解けない。
c.　しばしば足がつる。

(9)　B 類
a.　人気のない公園をのんびり歩こう。
b.　彼はすぐに返事ができなかった。
c.　部長は何も口出ししなかった。

(10)　C 類
a.　明日は雨が降るだろう。
b.　残念ながら、原稿が締め切りに間に合わなかったらしい。

(11)　D 類
a.　ねえ、明日は動物園に行くんだよね。
b.　おーい、そっちは行き止まりだよ。

2.2. 接続助詞

接続助詞は上記 A 類、B 類、C 類、D 類のどれを項にとりえるかで分類される。A 類～D 類それぞれのタイプの代表的な接続助詞を示すと(12)のようになる。

(12)　A 類：ーて（様態）、ながら（同時動作）、つつ、ために（目的）、まま、ように（目的）…
B 類：ーて（理由・時間）、れば、たら、から（行動の理由）、ために（理由）、ように（比況）…
C 類：から（判断の根拠）、ので、が、けれど、し、て（並列）…
D 類：と（引用）、という

[田窪 1987: 39,(5)]

2.3. 独立度を測る基準

A 類-D 類の階層では、下位（A 類）から上位（D 類）に行くにつれて節の独立度は高くなる。ここでは、節の独立度を測るいくつかの基準を挙げる。

2.3.1. 不定詞を含むかどうか

節が不定詞（「ナニガ」「ナンノ」等）を含むのは A 類、B 類の特徴であると言える。(14)のように、C 類の「ノデ」では不定詞は含めない。

(13)　　**何が**起こっ**たら**、君は焦りますか。

(14)　　*__何が__起こる**ので**、君は焦りますか。

2.3.2. 「ダロウ」のようなモダリティ形式をとるかどうか

「ダロウ」のようなモダリティ形式をとる節はC類である。(16)のように、B類の「タラ」を含む節は容認度が低い。

(15)　　明日は雨が降る**だろうから**、傘を持って行こう。

(16)　　*明日雨が降る**だろうたら**、傘を持って行こう。

2.3.3. 疑問の焦点になるかどうか

疑問の焦点は、文末の述語を除いては、「ノ」のスコープ内に含まれる要素である。(17)(18)のように、A類「ナガラ」やB類「カラ」を含む節は疑問の焦点になるが、(19)のように、C類「ケレドモ」などを含む節は疑問の焦点にならず、主節の部分のみを問う疑問文となる。（[]は疑問の焦点に当たる位置を示す。）

(17)　　[日本語を勉強し**ながら**]、留学するのですか。
　　／いや、ロシア語を勉強しながらです。

(18)　　[日本語を勉強する**から**]、留学するのですか。
　　／いや、ロシア語を勉強するからです。

(19)　　日本語を勉強する**けれども**、[留学する]のですか。
　　／いや、留学しません。

2.3.4. 評価の副詞（残念ながら、不幸にも…）をとるかどうか

評価の副詞を取るのは、C類である。(21)のようにB類の「テハ」などを含む節は、評価の副詞を取ることはできない。

(20)　　[**不幸にも**国境は分断されるだろう]**から**、まもなく世界情勢は変わるだろう。

(21)　　**不幸にも**[各国が論争を続け]**ては**、事は悪化するだろう。

2.3.5. 同じ階層に属する他の節を含めるかどうか

A、B、C、D 類の下位の節は、上位の類の要素を含むことはできない。したがって、(22)のように、A 類のナガラは B 類のタラを含むことはできない。反対に、(23)のように、C 類のノデは B 類のタラを含むことができる。（[]は(22)でナガラ、(23)でノデが含む節を示している。）

(22)　B 類のタラと A 類のナガラ

危険なとこに行っ**たら**、[手をつなぎ]**ながら**、歩きなさい。

(23)　B 類のタラと C 類のノデ

[山道に行っ**たら**、危ない]**ので**、手をつなぎなさい。

2.4. P タメニ Q における P の独立度

田窪(1987)が示したように、節の独立度を測ることでその節の特徴や制限をある程度述べることができる。ここからは、「不定詞を含めるか」「疑問の焦点になるか」「同じ階層に属する他の節を含めるか」「ダロウのようなモダリティを含めるか」という 4 つの基準を用いて、P タメニ Q における P の独立度を測っていく。

2.4.1. 不定詞を含めるか

(24)のように、タメニは不定詞を含むことができる。「不定詞を含めるか」という点において、P タメニ Q における P は A 類もしくは B 類の性質を持つと言える。

(24)　何をするために、転職するの？

2.4.2. 疑問の焦点になるか

(25)のように、タメニ節に疑問の焦点が来ているため、「疑問の焦点になるか」という点において、P タメニ Q における P は A 類もしくは B 類であると言える。（[]は疑問の焦点に当たる位置を示す。）

(25)　-- [哲学を学ぶために]、大学に行くのですか。

--　いや、経済を学ぶためです。

2.4.3. 同じ階層に属する他の節を含めるか

P タメニ Q のとき、タメニ節は(26)のように、A 類の「ナガラ」、B 類の「ヨウニ」（比況）を含むことはできるが、C 類の「ノデ」を含むことはできない。（[]はタメニが含む節を示している。）

(26)　A 類のナガラ

[子育てをし**ながら**、効率的に仕事をする]ために、時間の使い方を見直した。

B 類のヨウニ

[母親がした**ように**、効率的に仕事をする]ために、時間の使い方を見直した。

C 類のノデ

育児に手が回らない**ので**、[効率的に仕事をする]**ために**、時間の使い方を見直した。

このことから、「同じ階層に属する他の節を含めるか」という点において、P タメニ Q のとき、P は C 類ではないと言える。

2.4.4. 「ダロウ」のようなモダリティを含めるか

タメニ節には、(27)のように「ダロウ」を含むことができない。よって、「「ダロウ」のようなモダリティを含めるか」という点において、P タメニ Q における P は C 類ではないと言える。

(27)　　*会議に遅れない**だろう**ために、早めに家を出よう。

以上のように、P タメニ Q で、P が不定詞を含むという点、P が疑問の焦点になるという点において、タメニは A 類もしくは B 類の性質を持つと言える。ただし、同じ階層に属する他の節を含むかどうかという点において、タメニは B 類を含むことができたので、ここでは P タメニ Q における P は B 類の性質を持つと言える。ただし、B 類の大きな特徴である「時制」を含むという点においては、「目的」の意を表す今回のタメニ節は、過去形を表すことはできない。以下、P タメニ Q における P の独立度が、A 類、B 類を導く他の代表的な接続詞と比べた場合、どこに位置するのかを下記の表 1 にまとめた。この表からも、P タメニ Q における P が B 類に属することがわかる。

表 1

	タメニ	タラ(B 類)	ナガラ(A 類)
不定詞を含めるか	○	○	○
疑問の焦点になれるか	○	○	○
他の B 類を含めるか	○	○	×
「ダロウ」を含めるか	×	×	×

2.5. P タメニハ Q における P の独立度

「タメニ」と同様に、４つの基準を用いて、P タメニハ Q における P の独立度を測っていく。

2.5.1. 疑問の焦点になれるか

(28)のように、「タメニハ」を用いた疑問文では、タメニハ節に焦点が来ることができず、主節の部分のみを問う疑問文となっている。このことから、「疑問の焦点になれるか」という点において、P タメニハ Q における P は C 類であると言える。

(28) -- 哲学を学ぶためには、[大学に行く]のですか。
-- いや、大学には行きません。

2.5.2. 不定詞を含めるか

(29)のように、タメニハ節には不定詞を含むことができない。よって、「不定詞を含めるか」という点において、P タメニハ Q における P は C 類であると言える。

(29) *何をするためには、転職するの？

2.5.3. 「ダロウ」のようなモダリティを含めるか

(30)のように、タメニハ節には「ダロウ」を含めることができない。よって、「「ダロウ」のようなモダリティを含めるか」という点において、P タメニハ Q における P は C 類ではないと言える。

(30) *道路の混雑を避ける**だろう**ためには、6 時ごろ家を出なさい。

2.5.4. 同じ階層に属する他の節を含めるか

P メニハ Q のとき、(31)のように、タメニハ節は A 類の「ナガラ」、B 類の「ヨウニ」は含むこと出来るが、C 類の「ケレド」を含む文は不自然である。よって、「同じ階層に属する他の節を含めるか」という点において、P タメニハ Q における P は C 類ではないと言える。（[]はタメニハが含む節を示している。）

(31) A 類のナガラ
[子育てをし**ながら**、効率的に仕事をする]ためには、時間の使い方を見直す必要がある。
B 類のヨウニ

[母親がした**ように**、効率的に仕事をする]ためには、時間の使い方を見直す必要がある。

C 類のケレド

?[とても疲れている**けれど**、効率的に仕事をする]ためには、時間の使い方を見直す必要がある。

以上、P タメニハ Q で、P が疑問の焦点になれないという点、P に不定詞を含むことができないという点において、P は C 類であると言える。ただし、P が「ダロウ」のようなモダリティを含めることができないという点、同じ階層に属する他の節を含むことができないという点において、他の C 類とは異なる。さらに、「タメニ」と C 類を導く他の接続詞と比較することで、P タメニハ Q における P の独立度の位置づけを、以下の表 2 のようにまとめた。

表 2

	タメニハ	ガ/ケレドモ(C 類)	タメニ
疑問の焦点になれるか	×	×	○
不定詞を含めるか	×	×	○
「ダロウ」を含めるか	×	○	×
他の C 類を含めるか	?	○	×

P タメニ Q と P タメニハ Q の従属節 P を比較した結果、P タメニ Q における P は B 類の性質を持ち、P タメニハ Q における P は C 類の性質を持っていることがわかった。ただし、P タメニ Q おける P が過去形を表すことができない点、P タメニハ Q における P が「ダロウ」のようなモダリティ形式を表せない点、他の C 類を同じ節に含むことができない点など、一般的な B 類、C 類とは異なる点もいくつか見られたが、田窪(1987)の示した階層的統語表示に従えば、上記のような位置づけになると考えられる。また、表 2 からも明らかなように、節の独立度を見れば、タメニハ節のほうが、タメニ節よりも高い。

第 1 章で疑問となっていた(2a)と(2b)の違いも、タメニ節が B 類の特徴を持っていることが大きな要因である。田窪(1987)が説明しているように、ヨウニ（目的）節は A 類の特徴を持ち、カラ（判断の基準）節は C 類の特徴を持っている。タメニ節は下位の層に属するヨウニは含むことができたが、上位の層にあるカラを含むことができなかったことが、先述の違いを生んだ。

3. P タメニ Q と P タメニハ Q における主節 Q の分析

第 1 章で見たように、P タメニ Q と P タメニハ Q では、主節 Q にも違いが見られ、P タメニハ Q の方が制限は多い。一般的に P タメニハ Q の主節には、(3)のように必要性を述べる場合が多いようである。しかし、タメニハの主節の述語が(32)のように、「存在」や「当為評価」などの意味を表す動詞のときも文の容認性は高い。また、(4)で不適切であった例文も、(4)'のようにすると、似たような文であるが、文の容認性は高くなるようである。

(32) --存在
魚を切るためには、この包丁がある。

--当為評価
魚を切るためには、この包丁を買うべきだ。

(4) *部屋をきれいにするためには、掃除機を買った。
(4)' 部屋をきれいにするためには、掃除機を買ったり、ごみを捨てたりした。

以上のような事例から、P タメニハ Q 構文の容認度には、主節の述語の種類が影響を与えていると考えた。よって、P タメニ Q と P タメニハ Q の主節の述語に注目して分析をしていった結果、以下の結論を見出した。

(33) P タメニハ Q のとき、P タメニハという主題に対して、Q は、さまざまな選択肢の中からある 1 つを選択したもの、という関係性にある。Q には、他に考え付く選択肢がある場合、次にとるべき行為の選択肢を想起させるような表現が来る。

ここからは主節の述語を動詞、形容詞、形容動詞の 3 つの場合に分けて分析を進めていく。

3.1. 動詞

まずは、主節の述語が動詞の場合を見ていく。ここまで見てきた例文では、P タメニハ Q の文において、主節の述語が「存在」や「必要」などの意の、いわゆる物事の「状態」を表すような動詞が来ており、それらの文の容認性が高いようであった。反対に、主節の述語が過去の一回の「出来事」を表すような動詞の場合は、容認性の低い文が見られた。よって、ここからは主節の述語動詞を細かく分けて、文の容認性を判断していくこととする。

3.1.1. 状態動詞

ここからは、主節の述語が状態動詞の場合を見ていく。状態動詞は動詞の原型で物事の状態を表すことのできる動詞である。これらの文は、P タメニ Q・P タメニハ Q ともに容認度の高いものであった。

(34) a. 生徒を育てるために、教師がいる。（存在）
b. 明日遅刻しないために、早く寝る必要がある。（必要）
c. 明日の試験に合格するために、まだ勉強ができる。（可能）

(35) a. 生徒を育てるためには、教師がいる。（存在）
b. 明日遅刻しないためには、早く寝る必要がある。（必要）
c. 明日の試験に合格するためには、まだ勉強ができる。（可能）

3.1.2. 「意図・願望・当為評価・有益」を表す動詞

次に見る例は、主節の述語動詞が「意図・願望・当為評価・有益」を表す場合だ。これらも、P タメニ Q・P タメニハ Q ともに容認性の高い例であった。

(36) a. 鑑賞するために、この刀を買う。（意図）
b. 鑑賞するために、この刀を買おう。（願望）
c. 鑑賞するために、この刀を買うべきだ。（当為評価）
d. 鑑賞するために、この刀は役に立つ。（有益）

(37) a. 鑑賞するためには、この刀を買う。（意図）
b. 鑑賞するためには、この刀を買おう。（願望）
c. 鑑賞するためには、この刀を買うべきだ。（当為評価）
d. 鑑賞するためには、この刀は役に立つ。（有益）

3.1.3. テイル形で状態を表す動詞

次に、主節の述語が動詞のテイル形で物事の状態を表す表現を見ていく。金田一(1950)でも述べられているが、瞬間動詞がテイル形と結びつくと、「動作の完了からその後の結果の状態」を表すことができる。「（明かりが）つく」や「決まる」などの瞬間動詞のテイル形では、P タメニ Q の文では容認可能だが、P タメニハ Q の文においては、容認性は低い。

(38) a. 子供たちを安心させるために、部屋に明かりがついている。

b.　皆を納得させるために、この案で決まっている。

(39)　a.　*子供たちを安心させるためには、部屋に明かりがついている。
　　b.　*皆を納得させるためには、この案で決まっている。

また、継続動詞のテイル形も「結果の状態」を示すことができる。「読む」や「走る」などの継続動詞のテイル形でも、P タメニ Q のとき容認性は高いが、P タメニハ Q のとき容認性は低い。

(40)　a.　愛とは何かを知るために、この本を５回も読んでいる。
　　b.　200 キロカロリー消費するために、ぼくはもう十分走っている。

(41)　a.　*愛とは何かを知るためには、この本を５回も読んでいる。
　　b.　*200 キロカロリー消費するためには、ぼくはもう十分走っている。

3.1.4.　「継続」を表す動詞

次は、主節の述語が「継続」を表す動詞の場合を見ていく。継続動詞がテイル形と結びつくと、先ほど述べた「結果の状態」だけでなく、「動作の進行中」の意味を表すことができる。このような文では、P タメニ Q のとき容認性は高いが、P タメニハ Q のとき容認性は低い。

(42)　a.　愛とは何かを知るために、今この本を読んでいる。
　　b.　200 キロカロリー消費するために、今走っている。
　　c.　親に空腹を伝えるために、赤ちゃんは泣いている。
　　d.　生命の儚さを知らせるために、桜の花は散っている。

(43)　a.　*愛とは何かを知るためには、今この本を読んでいる。
　　b.　*200 キロカロリー消費するためには、今走っている。
　　c.　*親に空腹を伝えるためには、赤ちゃんは泣いている。
　　d.　*生命の儚さを知らせるためには、桜の花は散っている。

3.1.5.　「動作の完了」を表す動詞

ここからは、主節の述語が「動作の完了」を表す動詞の例を見ていく。この表現として、まず動作動詞の単純過去形の場合がある。この場合、P タメニ Q の文では容認性は高いが、P タメニハ Q の文ではその容認性は低い。

(44) a. 愛とは何かを知るために、この本を読んだ。
b. 200 キロカロリー消費するために、走った。
c. 子どもたちを安心させるために、部屋に明かりがついた。
d. 皆を納得させるために、この案に決まった。

(45) a. *愛とは何かを知るためには、この本を読んだ。
b. *200 キロカロリー消費するためには、走った。
c. *子どもたちを安心させるためには、部屋に明かりがついた。
d. *皆を納得させるためには、この案に決まった。

しかし、(45a)や(45b)のような文では、主節が複数の要素を持つとき、例えば「～たり、～たりした」のような文のとき、その容認度は上がりそうだ。

(46) a. 愛とは何かを知るためには、この本を読ん**だり**、教会に行っ**たり**した。
b. 200 キロカロリー消費するためには、走っ**たり**、腹筋をし**たり**した。

ここまで、P タメニ Q と P タメニハ Q の主節 Q にさまざまなタイプの動詞を当てはめて分析を進めてきた。P タメニ Q ではいずれも容認性の高い文であったが、P タメニハ Q の文では、容認性の低い例がいくつか見られた。

容認性の低い例の共通点として挙げられるのは、P タメニハ Q という文で、P タメニハという主題に対しての解決法や対策を、主節 Q で既にし終えている、もしくは現在進行形で実践中である表現の場合であるということだ。上述の「テイル形で状態を表す動詞」や「動作の完了を表す動詞」の例からわかるように、目的に対する解決法を選んで行った後の状態を表す文は容認度が低い。「継続を表す動詞」の例のように、目的に対する策を選んで、現在進行形で実践している文も容認性が低い。

反対に、容認性の高い文の共通点として挙げられるのは、P タメニハという主題に対しての解決法や対策の選択肢から 1 つを選んで述べているということである。上述の「状態動詞」や「「意図・願望・当為評価・有益」を表す動詞」の例では、さまざまな選択肢の中からある 1 つを選び、候補として述べているもので、まだ実践していない状態である。(46)の例文では、数ある選択肢の中から複数選んで実践しているものの、「～たり、～たりした」という表現が、まだ他に行うべき行為や次に行うべき選択肢を暗に想起させる効果を発揮しており、容認度が上がっているのだと考える。これは、(47)のように、「～たり、～たりした」という表現を外してみたときに、文の容認度が下がることからも確認できる。

(47) a. *愛とは何かを知るためには、この本を読んで、教会に行った。

b.　*200 キロカロリー消費するためには、走って、腹筋をした。

ここまで「状態動詞」「「意図・願望・当為評価・有益」を表す動詞」「テイル形で状態を表す動詞」「継続を表す動詞」「動作の完了を表す動詞」を P タメニ Q・P タメニハ Q の主節の述語にそれぞれ当てはめて分析をしてきた。共通して言えることは、P タメニハ Q という文において、P タメニハという主題に対して、主節 Q は、さまざまな選択肢の中から、ある一つを選択したものという関係性にあることだ。P タメニハ Q という文は、主節 Q の述語が他の選択肢を持つ場合、もしくは、次にとるべき行為の選択肢を想起させる場合に、容認度が高くなる。これは、P タメニハという表現が、意味的に主節にさまざまな選択肢・行為の存在を要求する用法だからである。このため、(29)のように、従属節の内容を問う疑問文を作ることはできない。しかし、(29)'のように、主節の内容を問う疑問文であれば、可能である。

(29)　*何をするためには、転職するの。
(29)'　転職するためには、何をするの。

以上、P タメニ Q と P タメニハ Q の主節の述語が動詞の場合を分析してきた。

3.2. 形容詞

次に P タメニ Q と P タメニハ Q の主節 Q の述語が形容詞の場合を見ていく。以下にその例を挙げたが、いずれも容認度は高いものであった。

(48)　a.　一年間の計画を立てるために、元旦は都合がいい。
　　b.　彼に感謝の意を伝えるために、対面のほうが気持ちがいい。

(49)　a.　一年間の計画を立てるためには、元旦が都合がいい。
　　b.　彼に感謝の意を伝えるためには、対面のほうが気持ちがいい。

しかし、以下のような文においては、P タメニ Q の文では容認度は高いが、P タメニハ Q の文では容認度が低い。

(50)　a.　将来外車を購入するために、彼の貯金は多い。
　　b.　100 人分の椅子を用意するために、この部屋は広い。

(51)　a.　*将来外車を購入するためには、彼の貯金は多い。
　　b.　*100 人分の椅子を用意するためには、この部屋は広い。

ところが、上記の例文の主節を以下のように変えると、文の容認度は逆転し、P タメニ Q の文で低くなり、P タメニハ Q の文で高くなる。

(52) a. *将来外車を購入するために、彼の貯金は少ない。
b. *100 人分の椅子を用意するために、この部屋は狭い。

(53) a. 将来外車を購入するためには、彼の貯金は少ない。
b. 100 人分の椅子を用意するためには、この部屋は狭い。

このように、(50)と(52)、(51)と(53)を比較すると、一見似たような文ではあるが、上記のように容認度に差がある。このような文の共通点として挙げられるのは、「彼の貯金は多い／少ない」「この部屋は広い／狭い」のように、主節が二項対立の様相を呈しているということだ。このように、主節が、対立するもう一つの表現を想起させる場合、P タメニ Q の文では P タメニという目的に対し、主節には「望ましい」意味の表現が来、P タメニハ Q の文では、P タメニハという目的に対し、主節には「望ましくない」意味の表現が来る。「外車を購入する」という目的に対し、「貯金は多い」ことが望ましいし、「100 人分の椅子を用意する」という目的に対しては、「部屋は広い」ことが望ましい。

(53)のように、P タメニハ Q の主節に、目的に対する「望ましくない」意味の表現が来るのは、主節の述語が動詞のときに述べた考察と同じ理由からだろう。P タメニハ Q の文では、P タメニハという主題に対し、主節 Q は他のさまざまな選択肢を有すものである必要があると述べた。これと同じで、主節の述語が形容詞の時にも、「望ましくない」意味の表現が来たほうが、その他の代わりの選択肢を自然と想起しやすい。それ故、P タメニハ Q の文で、主節が対立するもう一方の選択肢を想起させる「二項対立」の様相を呈しているとき、主節 Q の述語には、目的に対して「望ましくない」意味を持つ形容詞がふさわしくなるのであろう。

反対に、(48)や(49)のような文では、主節は「元旦が都合がいい」「対面のほうが気持ちがいい」と他の選択肢は想起できるものの、二項対立の形ではない。このような場合、P タメニ Q の文、P タメニハ Q の文でも容認性は高いものになる。

3.3. 形容動詞

次に P タメニ Q と P タメニハ Q の文の主節 Q の述語が形容動詞の場合の例を以下に挙げる。文の容認度はいずれも高いものであった。

(54) a. 魚を捌くために、出刃包丁は便利だ。

b.　国を変えるために、彼は適任だ。
c.　クラス全員の気持ちを揃えるために、その案に賛成（反対）だ。

(55)　a.　魚を捌くためには、出刃包丁が便利だ。
b.　国を変えるためには、彼が適任だ。
c.　クラス全員の気持ちを揃えるためには、その案に賛成（反対）だ。

ここまで、P タメニ Q と P タメニハ Q における主節 Q の述語を動詞、形容詞、形容動詞の場合に分けて分析を進めてきた。すべての品詞に共通して、P タメニハ Q の文において、P タメニハという主題が、意味的に主節にさまざまな選択肢・行為の存在を要求する用法であることが言える。それ故、P タメニハという主題に対して、Q は、さまざまな選択肢の中からある一つを選択したもの、という関係性にある。主節の述語が動詞の場合、他に考え付く選択肢があるとき、主節に次にとるべき行為の選択肢を想起させるような表現が来る。主節の述語が形容詞の場合、主節が、対立するもう一方の選択肢を想起させるとき、P タメニ Q では主節 Q に、目的に対して「望ましい」意味の表現が来、P タメニハ Q では主節 Q に、目的に対して「望ましくない」意味の表現が来るということを述べた。

3.4. 塩入(1992)との比較

タメニ・タメニハに加えて、「トキニ（ハ）」「以上（ハ）」などの「ハ」が付くときとそうでないときの違いについて研究した論文として塩入(1992)がある。ここでは、塩入(1992)が述べた P タメニ Q と P タメニハ Q の主節の違いについて、本章でここまで論じてきた内容との比較をしていきたい。塩入(1992)は、P タメニ Q と P タメニハ Q の主節の違いについて、まず以下の例文をあげて説明している。主節の述語が「一回の動作の実現を表す」場合、タメニハ文では不適切になると述べている。

(56)　a.　漢字を調べるために、辞書を買った
b.　*漢字を調べるためには、辞書を買った

[塩入 1992: 63,(8)]

(57)　a.　両親に会うために、3 日間の休暇を取った。
b.　*両親に会うためには、3 日間の休暇を取った。

[塩入 1992: 59,(1)]

したがって、(57)のように、タメニハ文の主節に動作性述語の単純過去形を用いていても、(58)のように、「「マデ」のような取り立て助詞を用いた場合」や、(59)のように「多

くの行為を列挙する場合」、(60)のように「多くの行為を意味するような動詞を用いた場合」には、適切な文となる。

(58)　両親に会うためには、3 日間の休暇**まで**取った。
(59)　両親に会うためには、休暇を取っ**たり**、列車の手配をし**たり**した。
(60)　両親に会うためには、**ずいぶん苦労した**。

[塩入 1992: 60,(3)abc]

また、上記(56)と以下の(61)の例を列挙して、タメニ・タメニハ文の特徴を述べている。

(61) a.　この辞書は、漢字を調べるために、ある（存在）／買わなければならない（必要）／使う（使用）／役に立つ（有益）／買う（意図）／買おう（願望）／買うべきだ（当為評価）
b.　漢字を調べるためには、この辞書がある（存在）／を買わなければならない（必要）／を使う（使用）／が役に立つ（有益）／を買う（意図）／を買おう（願望）／を買うべきだ（当為評価）

[塩入 1992: 63,(9)]

(56)は、主節の述語が意志動作の単純過去形の場合、(61)は存在・必要・使用・有益を表す述語、意図・願望、当為評価の述語の場合である。これらの例から、「「タメニ」では従属節が範列的関係を持つのに対し、「タメニハ」では主節が範列的関係を持つ。」と塩入(1992)は主張している。そして、「「タメニハ」の主節は意味的には必要条件を表し、必要条件を述べるということは、逆から言うと、不必要な他の条件を排除することであるから、不必要な他の条件の存在を意味することになり、範列的関係を持つことになる」。さらに、これが原因として、「「タメニハ」の主節に、複数の動作の実現を意味するような場合は、適切な文となる」と述べ、「逆に、一回の動作の実現を表す文というのは、最も範列的関係を持ちにくいということが言える。一回の動作の実現を述べるということは、他の動作の実現を排除することではあるが、最も意味しにくいのである」、と塩入(1992)は主張している。

まとめると、塩入(1992)は P タメニハ Q の主節が「範列的関係」を持つことが原因で、P タメニハ Q の主節には「一回の動作の実現を表す文」がふさわしくないと述べている。このように、塩入(1992)が一言で片づけている「範列的関係」というものを、本論文の第 3 章でよりかみ砕いて述べ、さらに他の例文とともに併せて記した。また、塩入(1992)では P タメニ Q、P タメニハ Q の主節の研究における例文の数が少なく、説明も不十分であったと感じたため、本論文では主節の研究における例文を複数用意し、より

詳細な研究を行うことができた。また、主節の述語が形容詞や形容動詞の場合についても本論文で新たに記すことができた。

4. まとめ

本論文では目的の意を表す接続詞タメニとタメニハについて研究を行った。P タメニ Q と P タメニハ Q という形式の文について「従属節」と「主節」に分けてその違いを述べてきた。

まず、従属節については、節の独立度を測りその特徴を示した。P タメニ Q の文の従属節は B 類の性質を持ち、P タメニハ Q の文の従属節は C 類の性質を持つ。独立度としてはタメニよりもタメニハの方が高いことがわかった。

主節については、主節の述語が動詞、形容詞、形容動詞の 3 つの場合に分けてその用法を研究した。その結果、P タメニハ Q の文では、P タメニハという主題に対して、主節 Q は、さまざまな選択肢の中からある一つを選択したもの、という関係性にあることがわかった。主節には、その他にもさまざまな選択肢を持つもの、別の選択肢を想起させるような表現が来る。

なお、タメニやタメニハと似た表現のタメナラバやタメニモなどの接続詞の用法については、今回明らかにすることはできなかった。それらを含めた目的節の用法を明確にしていきたい。今後の課題である。

参照文献

田窪行則(1987)　「統語構造と文脈情報」『日本語学』6 pp.37-48. 明治書院
南不二男(1974)　『日本語の構造』　大修館書店
塩入すみ(1992)　「「X ハ」型従属節について」　『阪大日本語研究』4 pp.59-71.
塩入すみ(1993)　「「テハ」条件文の制約について」『阪大日本語研究』5 pp.67-81.
金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15

謝辞

本論文を執筆するにあたり、指導教官である上山あゆみ先生には大変丁寧なご指導をしていただきました。研究に行き詰まり、自分に負けてしまう場面が何度もありましたが、そんな時にも常に親身になって私の論文と向き合ってくださいました。何より、いつもの元気な声に何度救われことでしょう。他の学生よりも１年長く時間がかかりましたが、こうして本論文を書くことができましたこと、この場をお借りして心より感謝申し上げます。また、講義等を通して言語学に関する様々な知識を与えてくださいました、九州大学文学部言語学・応用言語学研究室の久保智之先生、下地理則先生、太田真理先生に感謝申し上げます。有難うございました。